高速戦艦『紀伊』夜襲命令

八幡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高速戦艦『紀伊』夜襲命令

【Ｎコード】
Ｎ４９７９Ｕ

【作者名】
八幡

【あらすじ】
１９３５年、第二次ロンドン海軍軍縮条約締結。その結果『金剛』代艦として建造された『紀伊』は、１４ｉｎ砲四連装三基十二門という投射量と、長門を上回る装甲、３２ｋｔの高速という驚異的な性能を誇る戦艦だった。
無条約時代の到来が少しだけ遅れた世界で、高速戦艦『紀伊』は海原を縦横に駆ける。

プロローグ　第二次ロンドン海軍軍縮条約

１９３６年、第二次ロンドン海軍軍縮条約が日・米・英・仏の間で締結された。
当初は日本が条約から脱退するのではないかとの下馬評だった（事実、条約脱退を見越した建艦計画が立案されていた）が、大方の予想に反して日本は条約を締結するという決定をくだした。
この為、制限緩和条項、通称エスカレーター条項は発動されず、戦艦の主砲は１４ｉｎに制限されたままとなった。
この影響により、日本国内は海軍を中心に上へ下への大混乱となったことは改めて述べる間でもないだろうが、なかでも直接的な影響を受けたのは第三次海軍軍備補充計画、通称マル３計画であろう。
マル３で計画されていた、１６ｉｎ（一説には１８ｉｎ）砲を主砲とする第１号型戦艦や拡大蒼龍型の第３号型航空母艦は白紙に戻され、条項型の紀伊型高速戦艦や戦時に空母へ改装することを前提とした水上機母艦の建造と、基地航空隊の大幅拡充がとって代わった。

軍縮条約の締結により、一時的に列強間の緊張は緩和された。
しかし１９３９年、ついにナチスドイツが英仏の同盟国ポーランドに対し最後通帳を突きつけると、英仏はドイツへ宣戦布告、第二次世界大戦が勃発した。これに伴い、英仏は相次いで条約を破棄。日米もこれに続き、二年後の１９４１年末には無条約時代を迎えることとなった。
一方、極東でも巨大市場中国を巡る日米の対立は深まるばかりで妥協点を見いだすことは叶わず、北部仏印進駐、日米通商条約の破棄、南部仏印進駐、石油・屑鉄の禁輸と状況は悪化する一方であった。
そして、中国大陸全土からの完全撤退要求、通称ハルノートをもって破局を迎え、１９４１年１２月８日、日本は米英蘭へと宣戦を布告。第二次世界大戦は名実共に世界大戦となった。

太平洋の両雄が、太平洋で激突する。

第一話　ヒット・エンド・ラン

４１年１２月８日　大日本帝国、英米蘭へ宣戦布告
同日　グアム占領、ウェーク基地機能喪失、コタバル上陸

１２月１０日　マレー沖海戦
８日にコタバルへ上陸した陸軍の橋頭堡を攻撃しようと、戦艦『プリンス・オブ・ウェールズ』『レパルス』、空母『インドミタブル』、軽巡２、駆逐艦４からなる英東洋艦隊が出撃した。
それに対し、それぞれ練習戦艦・予備艦から復帰した『比叡』『榛名』『霧島』と、水上機母艦改装空母の『日進』『春日』、古鷹・青葉型重巡に一個水雷戦隊、さらに潜水艦１０隻と陸攻７２機が迎撃。
英東洋艦隊は一隻残らず殲滅された。

１２月２５日　ギルバート諸島基地機能喪失、ウェーク再攻撃

４２年１月２日　マニラ陥落

１月１０日　蘭印作戦開始

１月１５日　バターン半島包囲戦開始
フィリピン各地に上陸し、順調に攻略を進める日本軍に対し、在比米軍と比警察軍はバターン半島に撤退、コレヒドール要塞へ籠城。
日本軍は陸海より半島を封鎖し主力を南方に転用した。
これを受けてルーズベルト米大統領は「ステーツはフィリピンの英雄マッカーサー将軍とボーイズを決して見捨てない。日本の弱小な艦隊は、我等が世界最強の艦隊によって粉砕されるだろう」と演説。

1月25日　TF16編成　司令官にW・ハルゼー中将
空母『エンタープライズ』『ヨークタウン』、戦艦『ノースカロライナ』『ワシントン』、巡洋艦8、駆逐艦14、高速タンカー2からなるTF16は、マーシャル、グアム、テニアン、マーカスを次々と空襲、目立った損害無く真珠湾へ帰投した。日本軍の損害は軽微。
ルーズベルト大統領の「ハルゼー提督のタスクフォースが太平洋をハリケーンのように暴れ回っている」という演説により、日本でもハルゼー台風として知られることになった。

2月21日　中部太平洋海戦
マーシャル諸島及びトラック諸島へ航空機を輸送する特設空母『春日丸』『八幡丸』『報国丸』『愛国丸』と、護衛の空母『龍驤』『祥鳳』『瑞鳳』他の艦隊が、トラック諸島攻撃の任務を帯び、増援を受けて再出撃したTF16に発見され、空襲を受けた。
三波に渡る空襲の末、スコールにも助けられ、『八幡丸』が沈没、『龍驤』『報国丸』が中破という損害を受けただけで済んだ。
同日、軍令部は最優先でハルゼー艦隊を迎撃するよう連合艦隊へ命令。GF司令長官　寺島健大将はWE作戦部隊へ第三次ウェーク攻撃作戦の中止とハルゼー艦隊の撃滅を命じた。

2月23日　トラック諸島へ向かうTF16を伊21が発見
二つの艦隊がトラック沖で激突しようとしていた……

第一話　ヒット・エンド・ラン（後書き）

大角人事は史実ほど徹底されなかったようです。

第二話　トラック環礁を砲撃せよ

１９４２年２月２４日
トラック諸島より北東に６００ｋｍ
第１６任務部隊　旗艦『エンタープライズ』

空母『エンタープライズ』の艦橋に、厳つい顔をした中年と、細面の男が立っている。

「司令、如何なさいますか？　最も、この荒天では航空隊を出すのは不可能ですが……」

ブローニング参謀長が艦橋に仁王立ちするハルゼー提督に問いかける。外はひどいどしゃ降りで、大粒の雨が艦橋のガラス窓を叩いている。

「そりゃあ、いくらなんでもこのどしゃ降りの中ボーイズを飛ばす訳にはいかねぇ。……ワイルド“キャット”と言えど、な」

自分の言った軽口が面白かったのか、にやりと口を歪める。

「犬は何処ですか、犬は。……それは良いとして、リー少将の戦艦部隊を突入させますか？」

「おう。ちょっち練度に不安があるが、どうせトラック泊地にたいした艦はいないんだろう？　それに、ツカハラの機動艦隊でも出てくるかと思ったのに、歓迎の一つもないじゃねぇか」

至極残念そうにそう言う。
情報部の分析では、塚原二四三の第一機動艦隊は内海にいるとのことであったし、事実正規空母四隻は瀬戸内海にいた。残りの三隻は中部太平洋海戦に参加し、内地へ向かっている最中である。
またこの前日、潜水艦がトラック泊地を偵察。旧式軽巡一隻を中心とする弱小な戦力しかいないことが確認されていた。

「はい。ではご命令を」
「よし、全艦で６００ｋｍ地点まで進出、レイ（Ｒ・スプルーアンス）の部隊以外はトラックを夜間砲撃だ！　ジャップをヒイヒイ言わせてやれ！」
微妙に命令の呈をなしていないハルゼーの命令をブローニング参謀長が適宜翻訳して各所に伝える。
「艦隊分割用意。スプルーアンス少将の部隊を本隊の護衛に拘置し、残りはリー少将の指揮下で夜間砲撃を行うように。発動時刻は――」

第４戦艦隊　旗艦『ワシントン』

「――第１６任務部隊第２群を率い、トラック環礁を夜間砲撃せよ、とのことです」
「そうかそうか。ふふ、腕が鳴るな」
エンタープライズからの命令に不敵に笑っているのは、ウィリス・リー少将。アメリカ海軍きっての砲術の大家で、特にレーダー射撃に造詣が深い。

「ただ……本艦や『ノースカロライナ』はともかく、急遽増援として編入された『サウスダコタ』『インディアナ』は就役してまだ日が浅く、十分な練度とは言い難いのですが……」

金髪の首席参謀が心配そうに言う。
サウスダコタ級は竣工を急ぎ、完熟訓練を最小限で切り上げて急遽合流した為、艦隊行動も若干不安という体たらくなのだ。

「それに、やはり本級の四連装１４ｉｎ砲は技術的に未成熟で、いざというとき不具合が発生するかもしれませんし。本当に敵艦隊は出てこないのでしょうか。」

と、艦長も同調する。
四連装砲塔の利点として、連装と比べて重量が３／４で済むのだが、このノースカロライナ級やサウスダコタ級、英国のキング・ジョージＶ世級のような形式の艦はどれも故障に悩まされている。

「大丈夫だろう。対地砲撃とはいえ実戦は実戦だ。演習と実際に撃つのとは大違いだから練度も上がるだろう。それに……だ」

特徴的な丸眼鏡を押し上げ、口元に笑みを浮かべてリー少将は続ける。

「これは極秘事項なのだが、日本海軍の暗号の一部解読に成功したらしい」
「本当ですか！？」
「……」

驚いた表情をみせた艦長の横で、首席参謀は懐疑的な目線を送って

いる。

「ああ。それによるとだ、奴らの主力戦艦隊は日本海に、空母機動艦隊は内海にいる。そして、作戦行動中の部隊で我々と遭遇する可能性があるのは、巡洋艦数隻を根幹とするウェーク攻撃部隊のみだそうだ」

もっとも、作戦は中止され、任務部隊は引き返したらしいがな。と、続ける。

それに対し、首席参謀が反論する。

「その判断は早計なのでは？　確かに、情報部はそう言ってきていますし、前回（第二次）の攻撃部隊は巡洋艦数隻が根幹でした。ですが、今回もそうであるという保証はありません。むしろ、我々との遭遇に備えて戦艦……コンゴウ級やキイ級を連れてきていても不思議ではない。と、私は思います」

そう言って、暑くなったのか軍帽を取り軽く頭を振る首席参謀。飛び出してきたアホ毛を撫で付けて軍帽を被り直す。

「いずれにせよ、前回が上手く行き過ぎたのです。狐は同じ罠に二度とはかからない、とも言います。……何隻か喰われる覚悟が必要やもしれません」

この時点では弱気に過ぎる言い種に、リー少将はやれやれ、というように肩をすくめる。

「まったく、キミは心配性だな。あまり悲観的なことを言えば兵の士気が下がる。気をつけて欲しいね」

「……はっ」

不承不承といった感で頷く首席参謀。
その肩にポンと手を置き、艦橋の皆に言い聞かせるように言う。
「大丈夫だよ。サウスダコタ級は完全な、本艦級は不完全とはいえ対１６ｉｎ防御だ。ナガト級なら逃げ切れるし、キイ級なら返り討ちだ」
その言葉に艦橋のそこここで笑いがまきおこる。
余裕を見せるリー艦隊に、帝国海軍の最初の一撃が忍び寄ってきたのは、丁度日付も変わって雨も止み、星空が見えてきた2月２５日午前2時。トラック環礁まで約２００ｋｍに迫ったころであった。

つづく

◇ＴＦ１６．２艦隊編成
第４戦艦戦隊　Ｗ・リー少将
戦艦『ノースカロライナ』『ワシントン』『サウスダコタ』『インディアナ』
第７巡洋艦戦隊　Ｔ・キンケイド少将
巡洋艦『ミネアポリス』『ニューオーリンズ』『ヴィンセンス』
第２巡洋艦戦隊　Ｗ・スミス少将
巡洋艦『アストリア』『ポートランド』
駆逐艦６隻

第二話　トラック環礁を砲撃せよ（後書き）

貴方も私も四連装。

ご意見ご感想お待ちしております

第三話　三川戦隊先行す

時間を巻き戻して、トラックへ急行中のＷＥ攻撃部隊。
この部隊は、この作戦のために連合艦隊の各艦隊から臨時に集められてきた混成部隊であり、若干連携に不安があること勘定に入れても有力な戦力を有していた。
今、海原を高速で巡航する艦艇、その中でも一際巨大なシルエットは、帝国海軍の誇る最新鋭戦艦の勇姿であった。
その戦艦隊の先頭を行く第三戦隊旗艦にして紀伊型三姉妹の長、戦艦『紀伊』。その艦橋と集合煙突の間の中央指揮所、通称第三艦橋に、三川軍一戦隊司令官と幕僚達が詰めていた。

「――以上、敵艦隊の突入戦力は戦艦４、巡洋艦６、駆逐艦数隻と推定されます」
「そうか。ならばこちらは戦艦３、巡洋艦８、駆逐艦十数。数の上では有利だが……間に合うのか？　砲撃を許せば“アレ”が危険になる」

三川軍一中将が懸念の表情を見せる。
それに対し、海図に各艦隊――ＷＥ主隊と先程切り離した千田貞敏少将の『千早』以下空母三隻を根幹とする第七航空戦隊、敵戦艦隊と空母部隊――の位置を書き込んでいた航海参謀がかぶりを振りながら答える。

「……ダメです。ギリギリ間に合いません。本戦隊のみなら最終防衛圏までに補足できますが……。潜水艦に任せる訳にはいかないのですか？」

最終防衛圏とは、トラックに展開する潜水艦隊が敷いた最終防衛ラ

インで、砲撃を阻止できるギリギリの距離に設定され、ここを踏み越えた場合は味方撃ちを恐れず（夜間なので敵味方の識別は困難）迎撃することになっている。

「いや、あまりにそれは投機的だ。……うむ、南雲長官に具申するとしよう、我々のみでの突撃を許可されたし、と」

「し、しかし閣下、本戦隊のみとなりますと、軽快艦艇への阻止能力が不足するのでは？」

首席参謀が至極全うな意見を吐くが、直ぐに横から反論を受ける。

「阻止能力という点では、本艦級は長砲身１５サンチ砲を多数装備しておりますし、元々少数での挺身攻撃も想定された任務の内です」

反論したのは砲術参謀の千早正隆少佐。対空砲術についてよく研究しており、三番艦『尾張』の艤装委員も経験している。

「敵重爆の水平爆撃を警戒して、というのもありますが、長１５サンチ砲を副・高角合わせて片舷１４門も積んでいるのはその為ですし、敵制空権下で挺身行動するため高角砲も多数搭載しています」

「そりゃあそうだ。だがな、それは乙型直駆が十分に配備されているのが前提……」

「そこまでだ。確かに君の言うことは最もだ、しかし、今はトラックを……決戦兵器の四発大攻をやらせる訳にはいかん」

そう言って三川少将が議論をやめさせる。

乙型直駆とは、秋月型直掩駆逐艦のことで、夕張型軽巡並みの艦体に長１０サンチ連装高角砲四基８門と四連装魚雷発射管を装備している。

「航海参謀、ちょっと来てくれ。通信、『愛宕』に、南雲長官へ打電してくれ。文面は――」

――WE攻撃艦隊旗艦『愛宕』

「――とのことです。終わり！」

通信兵から紙片を受け取った通信参謀が報告する。

「……なかなか三川君も大胆だね。戦艦数で勝る敵艦隊に水雷戦隊無しで先行するとは」

彼はあまり無茶をする人間ではないのだが、そう呟いたのはこの艦隊の司令長官、南雲忠一中将である。

「しかし……このままの速度だと間に合うかどうか、だからね」

「そうなると、訓練未了で二水戦をもってこられなかったのが悔やまれますな」

何しろ、一水戦の駆逐艦は吹雪型と暁型、二水戦のは最新鋭の陽炎型ですから。と、主参謀が応じる。

「吹雪型は睦月型よりはましとはいえ航続距離が短めだからね。……訓練済みの『雪風』までを連れてくる、という話もあったのだが……残念だね」

既に七航戦と共に分離した睦月型や水雷戦隊の中核を担う吹雪型は九〇式魚雷こそ装備しているが、旧式化は否めない。

また、駆逐艦は艦体が小さいため、波の高い外洋でスペック通りの高速で巡航するのは――これは睦月・吹雪型に限らず陽炎型でもだが――不可能だ。というか、できたらそれは巡洋艦という。

「では、先行させる、で宜しいですか？」

参謀長の確認に、南雲長官は顎を擦って少し考えて答える。

「ふむ……うん、そうだね。……よし、七戦隊にも命令だ」

――第三戦隊旗艦『紀伊』

「『愛宕』より返答！　『先行セヨ』です！」

通信参謀が大声で報告する。

「うむ。では航海参謀、聞いた通りだ。直ちに先程の予備命令を発動したまえ」

「了解！」

先程、航海参謀に策定させた命令――戦隊最大速力にあげ、前方の巡洋艦や水雷戦隊をかわして前に出る――を発光信号で僚艦に伝えさせる。

「……続報です、七戦隊を本戦隊の支援にあたらせる、とのことです。終わり！」

室内に軽いどよめきがおこる。

「七戦隊……栗田健男少将揮下の最上型四隻とは！　……有難い」

最上型巡洋艦は、１００００ｔクラスの艦体に長１５サンチ砲１５門を装備し速力３５ｋｔを叩き出す大型軽巡である。

無条約時代に突入した暁には２０サンチ砲へと換装する予定があったが、意外に長１５サンチ砲が優秀――散布界が小さく操作性も良好――であり、換装の手間と不具合が発生することを嫌ったため換装されなかった。

あと、新型砲弾の採用により、砲口径の不利を手数で補う目処がたったというのも大きい。

かくして、第三戦隊三川軍一少将揮下の高速戦艦『紀伊』『美作』『尾張』と直衛駆逐艦『秋月』、第七戦隊栗田健男少将揮下の大型軽巡『熊野』『鈴谷』『最上』『三隈』が単縦陣を組んで艦隊から離れた。南雲忠一中将直率の重巡『愛宕』『摩耶』と第一水雷戦隊大森仙太郎少将揮下の新鋭軽巡『音無瀬』以下特型駆逐艦は徐々に引き離され、日没頃には完全に置き去りとなった。

――日没　会敵予想時刻まで六時間強

既に全員戦闘服に着替え終わり、高級士官の面々は軍装をバッチリ着込んでいる。

首席参謀となにやら話している三川司令官に、砲術参謀が声をかける。

「閣下、戦闘計画を検討したいのですが」

千早参謀が提出した計画書にざっと目を通す。

「ふむ、中距離砲撃戦か。時間稼ぎに徹する訳だな？」

「はい。主力の水雷戦隊の到着までは持久に努めます。敵新型戦艦は本艦と同じく主砲口径１４ｉｎ・装甲は対１６ｉｎと推定されております。距離二万程度なら双方が互いに安全圏となりますので十分可能かと」

安全圏とは、ある主砲弾に対してある戦艦が重要区画をぶち抜かれない距離の意味で、例えば、紀伊型戦艦（条約型）の１４ｉｎ主砲に対してビッグ７で最も装甲の厚いネルソン級（ポストジュットランド型）の対１６ｉｎ装甲の安全圏は大体９０００ｍ～３００００ｍ。

分かりやすく言うと、『紀伊』が徹甲弾で『ネルソン』に致命傷を与えようと思ったなら、爆沈の恐怖に耐えつつ９ｋｍという至近距離に近づくか、３０ｋｍ以上から絶望的な命中率を我慢しつつ遠距離砲戦か、となるのだ。

「ふむ。では、二式通常弾で統制砲撃を行うのだな」

「無論です閣下。両方ともこの時の為に……砲口径の不利と数の劣位を覆す為に開発されたのですから」

どこか遠い目をする一同。しかしそれも一瞬のこと、すぐに表情を戻す。

「ではこれでいくとしよう。砲術長」

壁際に立っていた『紀伊』砲術長を呼び寄せる。

「は、はいっ」

「砲撃戦の際には本艦が統制艦となる。重責ではあるが、気負わず演習通りやってくれれば良い」
「さ、最善を尽くします！　失礼します！」
敬礼して少し不自然な歩き方でこの場を後にする砲術長。それを見て参謀の一人が思わず、
「大丈夫なのか……？」
と呟いた。
当然、最新鋭戦艦の砲術長ともなれば超のつくほど優秀な人物なのだろうが、あまりそのようには見えない振舞いであったためであろう。

１９４２年２月２５日　深夜

日付も変わって翌２５日、道真公の命日でもあるがわりとどうでもよく、艦隊は会敵予想海面に到着していた。
しかし、鵜の目鷹の目にゃんこの目、極限まで高められた帝国海軍見張り員の暗視能力をもってしても、天候が回復し星明かりが海を照らしていても、敵艦隊を発見出来ずにいた。
「まだ見つからんのか！？」
首席参謀の声音にも焦りの色が見られる。それに対し、
「トラックからも索敵攻撃隊が出たそうです。我々の下駄履き（水偵）も全機上がって索敵任務に就いております」

発見は時間の問題と、航空参謀は敢えて言い切ってみせた。無論、彼も内心は焦っているのだが。

そして、午前２時――戦史では１１分――ごろ。
突然、進行方向右寄りが人工の黄白色光に照らし出された。

「２時方向！　陸攻の零式吊光照明弾と思われます！」
「光の下に敵艦隊！　距離２６０００！」

遂に敵艦隊を捕捉した三川司令官は、南雲長官や周辺の潜水艦・航空機に彼我艦隊の位置を知らせると、敵艦隊の頭を抑えるべく回頭を命じた。

第四話　海鷲は夜空に舞う

トラック環礁沖　ＴＦ１６．２上空

「間違いないな？」

「眼下の艦隊より識別符丁の応答無し。間違いありません、敵艦隊です」

美幌海軍航空隊に属する一式陸攻が闇の中、ＴＦ１６．２上空へと侵入していた。

彼らの任務は攻撃隊の嚮導と照明弾の投下であり、その際には特定の敵味方識別符丁を打電するよう厳重に定められていた。

というのも、昨年のマレー沖海戦において陸攻隊は夜間爆撃を敢行。見事、小沢中将座乗の南遣艦隊旗艦に命中弾を与えるという戦果をあげるも不発であった。という教訓を生かしてのことである。

ちなみに、件の命中弾を出した陸攻の搭乗員は、柔道の猛者と名高い小沢治三郎提督直々に稽古をつけて貰える（拒否権無し）という名誉を得たとか、得なかったとか。

そして、今回は間違いなく敵艦隊であることを確認した嚮導機は、照明弾の投下進路に入る。

「……間もなく敵艦隊直上」

「爆弾倉開け」

扉の空気抵抗で機速がガクッとおちる。

「直上、今」

「ってー」

吊光照明弾が爆弾倉から離れ、艦隊上空で光を放つ。それを確認した攻撃隊指揮官は電信員に命じ、全軍突撃せよを意味するト連送を打電させた。

――ＴＦ１６．２　旗艦『ワシントン』

「敵襲！　日本海軍の夜襲の模様！」
「どこだ！　敵艦はどこにいる！？」

頭上に突然輝いた照明弾の光を日本艦隊の夜襲と判断した見張員達は艦影を見逃すまいと目を凝らし、対水上レーダーは電波の目を闇夜に光らせる。だが……

「敵艦、目視できません」
「対水上レーダー探知圏に目標なし」

周囲に敵艦はいない、という報告しか上がっては来ない。
それを聞いたリー少将は、眼鏡をずり上げながら、ふむ、と一言呟き、顔を上げて誰ともなしに問うた。

「と、なると、ブラフ……か？」
「小官はそうは考えません」

首席参謀が即時に異をとなえる。

「またキミかね？　……まあ、一応聞かせて貰おうか」
「は。まず、日本人の性質からしてブラフ等という小細工弄するとは考えにくいかと。彼らにできるのは奇襲・強襲・迂回攻撃の三つ

だけです。逆に言えば、如何に不利であろうとも突っ込んでくるかと」

そして、と、続ける。

「ツシマ沖では、彼らは戦艦から水雷艇まで持てる全てを夜戦に投入しました。それ以来、この傾向は強化されていると分析できます」

「ふむ。確かにな」

戦前からの研究では、対米戦において日本海軍は決戦に先立ち夜襲を行うと推定されており、それ自体は別段おかしな話ではない。

「ですから、Ｎｅｌｌや新型のＢｅｔｔｙが夜間に雷撃してきたとしても何ら不思議ではありません」

「そうだな、ミッチェルのような双発機が夜間に雷撃してくることも十分に考えられる……訳ないだろ」

思わずそのまま同意しかけた少将が我にかえって否定する。この時代、夜間攻撃はおろか夜間発進すら高等技術というのが常識であった。

「ふん、キミはあんな猿の細長く近眼な黒い目でまともに見えるとでもいうのか？　馬鹿らしい。奴らの飛行機だって猿真似に過ぎない劣悪品だ」

臆病風に吹かれたか、と続けて言った参謀長のほうがむしろ普通の見解だろう。

一応、直属の上司には逆らわず引き下がった首席参謀だが、内心は不満であったし、こいつが死ねば無能が減ってポストが一つ空くのに、と不穏なことを考えていた。

案外その時はすぐ訪れることになるのだが。

「警報！　左舷低空より接近する機影約３０！」

「Ｂｅｔｔｙだ！　糞ッ、雷撃だ！　奴らなんてクレイジーな……」

見張り達の絶叫が木霊する。

「は？　嘘だｒ……」

「……Ｇｏｄｄａｍｎ　ｉｔ　！　艦長！」

忌々しい！　と一言叫び、艦長を振り返る少将。

「……っ、右１８０。緊急回頭！　両用砲は対空射撃開始！　急げ！」

間髪入れず艦長は回避を命ずる。配置についていた両舷の両用砲が、おそらく命令の届く前に撃ち始めるも、ろくに照準も出来ていない上に陸攻の高度が低すぎて遥か遠くで炸裂している。

そして運命の時、その数秒間を正確に描写することは非常に困難である。

何せ、見張りからの報告三つ――本艦魚雷回避成功・殿艦『インディアナ』被雷・艦隊直上に新たな敵機群発見――が、ほぼ同時に艦橋に殺到し、更に血相を変えた通信参謀が首席参謀を突飛ばしてリー少将に駆け寄ったのだ。

それによって起こった一瞬の混乱の後、尻餅をついた首席参謀が悪態をつこうと大口を開けた刹那、艦橋を爆風が吹き抜け、艦中枢スタッフ達の意識を一時、或いは永遠に刈り取ったからである。

――三川戦隊　旗艦『紀伊』

「『尾張』、統制射撃準備完了」
「『美作』、統制射撃準備完了」
《『紀伊』、統制射撃準備完了。いつでも行けます！》

僚艦からの通信を読み上げる声に続き、射撃指揮所から砲術長の先程とは違う自信に溢れた声が響く。
既に入力された緒元に従い砲塔がゆっくりと旋回し、砲身が適切な仰角をとる。

「一式陸攻の夜襲は上手くいっているようだｎ――」
「距離二万、統制射撃装置よし。どうぞ、ご命令を」

首席参謀の呟きに被せて、万事準備が整ったことを千早参謀が告げる。この統制射撃装置により三戦艦の射撃データを共有出来、あたかも主砲３６門の巨大戦艦のように振る舞うことが出来るのだ。
そして、報告を受けた三川司令官は軽く深呼吸して命令を発した。

「よろしい……主砲・副砲、一斉撃ち方……撃ち方始め！」
「撃ち方始めぇ！！」

復唱の後、ブザーが三回鳴り、三川戦隊の３６サンチ主砲３６門が敵先頭戦艦に、紀伊型と最上型の長１５サンチ砲１０８門が軽快艦艇に火を吹いた。

つづく

◇WE攻撃部隊先遣隊艦隊編成

第三戦隊　三川軍一中将

戦艦『紀伊』『美作』『尾張』

駆逐艦『秋月』

第七戦隊　栗田健男少将

軽巡『熊野』『鈴谷』『三隈』『最上』

第五話　宴の始まり

ＴＦ１６．２　旗艦『ワシントン』

「――佐！　――てください！　――席参謀！」

艦橋に上がってきた士官に揺り起こされ、艦橋の床に延びていた主席参謀は、はっと我にかえるとばねで弾かれたように起き上がり、辺りを見回す。

「……なっ、……一体何が！？」

ほんの少し前とはうって代わって殺風景になった艦橋から何人もの幕僚達が運び出されてゆく。

「敵重爆の１５００１ｂ爆弾とおぼしきもの数発が命中、艦橋を爆風が吹き抜け、リー少将と艦長は意識不明、参謀長と通信参謀は……」

ちょうど、人間“だったもの”が二体分、外に通じるハッチから運び出される所だった。

「現在指揮を執れる中での最先任は貴方です。ご命令を」

「……わかった」

寸刻目を閉じ、短く息を吐いて顔をあげると、その緑色の目には強い意思の光が宿っていた。

「まずは任務部隊の被害状況を聞かせて貰おうか」

「はっ。まず、殿艦の『インディアナ』が被雷2、速力8ktまで低下。復旧作業中です。
　次に本艦ですが、第二砲塔天蓋に命中した爆弾の衝撃で二番三番砲射撃不能。艦橋中破、艦橋測距儀及びレーダー損傷。後部に命中した三発の爆弾により第三砲塔旋回不能。アンテナ塔倒壊。さらに後楼とカタパルト付近で火災発生、これは直ちにダメコン要員を向かわせました。他も復旧を試みております。出し得る速力12kt」
報告を聞き終わると、主席参謀はむぅ、と腕組みして忌々しげな口調で、しかし口元には笑みを浮かべて唄うように言った。
「大損害、大損害じゃないか。全く、何処の誰だ彼らを猿と言ったのは。日本海軍の航空隊は素晴らしい技量を持っているじゃないか。夜間雷爆同時攻撃とは」
「誉めてる場合ですか。それに喜んでいるように聞こえるのは気のせいですよね？」
頭でも打ったのか、という目付きで士官が問いかける。
「断じて気のせいだ。それに、正当な評価をしたまでだよ。
　ときに、後部の第三主砲塔は射撃自体は可能か？　また、両用砲群はどうだ？」
「は、えー、はい。射撃自体は可能です。両用砲群もまた戦闘可能です」
大変結構、と短く満足げに呟き、暫し考えを纏めたあと命令を発する。
「さて、では戦艦戦隊の指揮権は『ノースカロライナ』艦長に、艦隊の指揮権は第7巡洋艦戦隊のキンケイド提督に委譲。本艦と『イ

ンディアナ』はスミス提督の第２巡洋艦戦隊と共に撤退する。無線……はムリだから発光信号で伝えてくれ」
「はぁ！？　正気ですか？　戦意喪失と敵前逃亡で査問会逝きですよ？」

士官の言うことも最もで、現時点では付近に有力な脅威が無い以上、逃げ帰ったと見なされれば問題になっても仕方がないのだ。

「この速力では夜明け迄に離脱出来んだろう。……では、火災と被雷により速力の出ない我々にて敵を誘引、無傷の両艦の突入を容易足らしめんとす。とでも追加して」
「ですが……」
「ですがも糞もあるか。ノロノロついて行っても邪魔になるだけだ。面舵一杯、変針９０度！」
「了解、面舵一杯、変針９０度」

発光信号により主席参謀の言が僚艦に伝えられ、生き残りの操舵員が舵輪を回して艦がゆったりと艦首を振る。
そして、

「１０時方向に発砲炎多数！　戦艦を含む敵艦隊です！」
「なにぃ！？」

最早何度目かになるかわからない見張員の絶叫が艦橋に木霊し、数十秒後、戦艦隊の先頭に居た戦艦『ノースカロライナ』と、警戒の為前に出ていた巡洋艦『ミネアポリス』『ニューオーリンズ』『ヴィンセンス』周りに多数の水柱をたてた。

――三川戦隊　旗艦『紀伊』主砲射撃指揮所

戦艦『紀伊』の、『比叡』改装時からより洗練された筒型艦橋のトップ。そこに据えられた巨大な１５ｍ測距儀と九八式射撃方位盤から送られてきた距離と角度等の情報を元に主砲を一括管制するのがここ、主砲射撃指揮所である。

「第一斉射、遠弾です！」
「修正、下げ三。次射より急斉射！」
「了解！　下げ三。次射より急斉射！」

第一斉射の弾着データを元に砲撃諸元を修正し、第二射からは撃ちながら修正する急斉射へと移行するよう戦隊各艦に命ずる砲術長。修正後の諸元が射撃指揮盤に入力され主砲へと伝わり砲身が僅かに下がる。
このような射法の他に、交互撃ち方で半数を遠くに、もう半数を近くに撃ち込んで修正していく初弾観測二段撃方もあるのだが、今回は数で劣位にあり一刻も早く命中させる必要があったことや比較的近距離で観測機の支援が受けられること、あと砲術長の好みで初弾観測急斉射を採っている。

「第二斉射、撃ぇ！」
「撃っ！」

腹の底に響く轟音と共に１２発の二式通常弾が打ち出される。
着弾までには４０秒近くかかるが、それを待たずにランプが全て点灯し全砲が射撃可能となったことを示す。

「本艦射撃準備完了！　『美作』『尾張』も同様です！」
「よろしい。第三斉射、撃ぇ！」

「撃ぇ！」

砲術長の号令と共に三たび砲弾が撃ち出され、長１５サンチ砲それぞれ１５門振りかざし米軽快艦艇に襲い掛かる七戦隊を飛び越し、照明弾に照らされた敵戦艦へと弧を描く。

――第七戦隊『鈴谷』

『紀伊』を旗艦とする第三戦隊から見て右舷前方に約５０００ｍ。最上型四隻からなる第七戦隊は着弾観測機の支援を受けつつ艦同士の間隔を緊密にとりつつ敵巡洋艦二隻を相手に戦いを進めていた。

《……マ・メ・〇》

観測機からの『挟叉・命中弾・無し』を意味する符丁に砲術士官達が色めき立つ。

「遠近よし！　敵アストリア型に挟叉！　各砲急斉射に移行せよ！」

「よっしゃ捉えたぞ！　撃って撃って撃ちまくれぇい！」

今は栗田少将の座乗する『熊野』の直後に続き、共にニューオーリンズ級重巡『ヴィンセンス』に砲撃を集中させているところであり、艦橋は士官らの発する熱気と喧騒で満ちている。

そんな中、一人泰然として立っているのはカイゼル髭がトレードマークの木村昌福大佐。その立派なヒゲを扱きながら黙って状況を見守っている。今まで出した命令は「撃ち方始め」と「弾庫の連中に氷水持って行ってやれ」の二つのみであるが、指揮官がでんと構えているのは将兵にとって心強いものであった。

「あッ！　アストリア級二番艦発砲、星弾です！　更にノースカロライナ級二番艦発砲！」

今まで撃たれっぱなしだった米重巡が星弾を発射、星弾は七戦隊の上空で炸裂すると辺りを照らしながらゆらゆらと落ちてくる。
そして、照らしだされた七戦隊めがけて敵戦艦の一隻がいきなり主砲をぶっぱなしたのだ。数十秒後、『熊野』の鼻先数百ｍに六本の水柱がそそりたつ。
騒然とする艦橋要員達。自然と目線は艦長に集まる。回避なさらないのですか、敵戦艦の目標にされたのでは、そう問いたげな目線を一旦受けきり、静かに、それでいてはっきりと命じた。

「未だ捕捉されてはおらん。……砲戦を続行する」

巡洋艦の６ｉｎ砲や８ｉｎ砲のそれとは比べ物にならない戦艦の１４ｉｎ砲の水柱にも全く動じる様子を見せないその姿に、幕僚達も落ち着きを取り戻す。
――この艦では。

「『熊野』より発光信号！　右統制魚雷戦用意です！」
「……水雷長、右統制魚雷戦用意」

栗田少将の座乗する戦隊旗艦から無線と発光信号で魚雷を放つよう命令が届いた。司令官は迅速に勝負を決めることにしたようだ。悪く言えばビビったとも言える。
ちなみに、統制魚雷戦とは、統制艦――今回は『熊野』――の発射に合わせて一斉に魚雷を射つ戦法のことである。

「遠魚雷戦、第一射法！」

水雷長が僚艦と共同で九三式魚雷２４本を扇形に発射し敵艦隊の巡洋艦３と駆逐艦２をすっぽりと包み込むように調整するよう命じる。

「『熊野』魚雷発射！」

「発射はじめ！」

『熊野』の魚雷発射に合わせて『鈴谷』『三隈』『最上』も相次いで魚雷を発射。圧搾空気によって発射管から打ち出された九三式魚雷は、僅かな気泡と夜光虫の光を曳いて敵艦へと突き進んでいった。

「水雷長、魚雷の到達時間は？」

「７分３０秒です！」

「うむ。では砲術長、交互撃ち方」

「了解、交互撃ち方！」

内地ならどんぶり一杯掻っ込む程の時間が恐ろしく長く感じた。水雷長はこの時のことを後にそう語っている。

――再び、ＴＦ１６．２ワシントン』

「敵巡洋艦、針路変わらず！」

見張りが叫ぶのを聞いて首席参謀が腕組みしたまま舌打ちする。

「盲撃ちではビビってくれんかモガミクラス……」

実はかなりビビってるんではあるが、そんなことは知るよしもない。
「自分でダメで元々って言いながら撃たせたんでしょうに。ところで、あれは本当にモガミクラスなんですか？」
見張りの報告は、ミョーコーないしモガミクラス四隻、とのことであった。人手が足りず、軍艦年鑑も行方不明で艦種が特定出来ていない。
「艦橋並盛り、煙突はヘンタイさんが一本、後ろがフラットじゃないからモガミクラスだね。『アシガラ』なら見たことあるが、煙突と艦橋が全然違う」
どうやら日本特有の集合湾曲煙突は欧米人には理解されないらしい。ちなみに、妙高型の煙突は二本である。
「……それよりも、だ。さっきチラッと見えたが、ユーバリらしき軽巡が居たぞ。あいつは確か嚮導艦だ。水雷戦隊の襲撃に警戒せよ！」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ！」
電話線も所々断絶している為配置されている伝令が敬礼して走り出て行く。
「しかし……『ノースカロライナ』は大丈夫ですかね？　……敵戦艦に釣瓶撃ちにされているようですが、相手は何クラスなんでしょう？」
「さあな、この距離ではわからん。キイクラスでなければどうとでもなるさ」

１４ｉｎ１２門２７ｋｔ　（公式発表）のキイクラス以外なら逃げ切るか返り討ちにできる……筈だ。首席参謀がようやく敵戦艦に対して砲撃を開始した『ノースカロライナ』と『サウスダコタ』を眺めながらそう答える。
未だ無傷の二艦は、普段の１／３の速力しか出せない二艦を置いて砲戦の真っ最中だ。相変わらず集中砲火を浴びている『ノースカロライナ』から目を離さないまま首席参謀。

「コンゴウクラスの代艦が３０ｋｔ出せない訳が無いとは思うがな……」
「何か？」
「いや、独り言だ」

排水量３５０００ｔも怪しいものだ。とはいえ主砲口径は誤魔化せまい。ならばそう撃ち負けることも無いか。と、彼が口の中でそう呟いた時、三川戦隊の放った第七斉射が遂に『ノースカロライナ』を捉えた。

「『ノースカロライナ』被弾！　……火災発生！　艦全体が炎にッ！」

着弾の瞬間、前部主砲から艦橋、二本の煙突に後部主砲と艦の全体が火焔に包まれた。
松明のように燃え盛る『ノースカロライナ』。急によたよたしだした同艦を呆気にとられて声も無く見つめる臨時の艦橋要員を他所に、首席参謀が漏らした一言。

「……Ｉｎｆｅｒｎｏ」

その光景はまさに、見る者にダンテの『神曲』地獄篇を彷彿とさせる、灼熱地獄としか言い様の無いものであった。

第六話　地獄の劫火

三川戦隊　旗艦『紀伊』第三艦橋

砲戦の最中、分厚い装甲に護られた前艦橋根元後方の司令部施設。そこに詰める幕僚達も司令官も皆、弾着の報告を固唾を呑んで待っていた。

「第七斉射用意……弾着！」

そして弾着、直後に待ちに待った報告が主砲指揮所から届いた。

《……命中！　敵一番艦に命中弾４を確認！　更に敵一番艦で火災発生！》

主砲指揮所からの喜色に溢れた声がスピーカーから流れると、司令部内が俄に騒がしくなった。

「喰ったか！？　沈みそうか？」

「お、落ち着け！　二式焼夷通常弾は敵艦を沈める為にあるんじゃにゃい！」

「まず貴様が落ち着かんか」

騒然とする室内で、やはり千早参謀もまた興奮した面持ちで指揮所に通じる受話器のマイクを握りしめる。

「よし、その調子だ！　全てを燃やし尽くし灰塵と為せ！」

普段の彼からは考えられない程ハイになって声を張り上げる砲術参謀。その肩を三川中将が軽く叩く。
慌てて恐縮しつつマイクを差し出す千早。

「うむ。……あー、此方司令官。砲術、只今の射撃見事なり。主砲は引き続き敵一番艦を目標とせよ。副砲は敵三番艦に目標変更」
《了解！　主砲目標そのまま、副砲三番艦へ変更！　『美作』『尾張』へ打電せよ！》

今まで巡洋艦『ミネアポリス』を射撃していた長１５サンチ砲計４２門が、筒先を戦艦『サウスダコタ』に向ける。
しかし敵もさる者、今まで全く妨害を受けず、最も体勢を立て直す時間があった『サウスダコタ』が遂に有効な射撃を送りこんで来たのだ。
自艦の一斉射撃に匹敵する激震が艦を揺さぶる。

「右舷弾着！　近い！」
「左舷弾着至近！」

『紀伊』の両舷に水柱が立ち上り、見張員の報告が伝声管からほぼ同時に入る。
米戦艦の砲撃は日本戦艦に比べてばらつきはあるものの、それゆえに早いうちから命中する可能性を持つ。米戦艦のようにばらつきが大きい＝散布界が広い　ということは、狙いが未修整で甘いうちから命中する可能性があるが、反面狙いが正確になっても命中率はそう高くはならない。逆に、ばらつきが小さい＝散布界が小さい日本戦艦の場合、きちんと捕捉するまではまるで当たらないが、一度捉えれば命中率は格段に高くなる。

「只今の敵射撃、本艦に対し挟叉。捉えられたようですが如何なさ

いますか」
艦橋で艦の指揮をとる艦長が平静な声で伝声管づたいに問い合わせて来た。
「うむ。参謀長、本艦が重大な損傷を負うまでに二艦とも撃破することは可能かね？」
三川中将はそれに直ぐには答えず、若干影の薄い参謀長に水を向ける。
「は、……はい、十分可能です」
ちらりと砲術参謀を見る参謀長。無言で頷きが帰って来たのを確認して返答を返す。
その返答に三川中将は、そうか、とだけ返し、艦橋へ続く伝声管に口を当てる。
「針路そのまま。敵艦隊の撃滅を優先する」
「……了解」
艦長はそう短く答えて口を伝声管から離した。どうも艦橋要員に檄を飛ばしているらしく、気合いだとか腰を据え直せとか正念場だとかいう単語が途切れ途切れに聞こえてくる。
そうこうしているうちに次弾の着弾時刻となった。
「第八斉射用意……弾着！」
《命中！　一番艦に命中弾2、火災範囲艦全体に拡大！　良いぞぉ、燃やし祭りの始まりだぁ！　》

そんな奇祭はさておき、１４ｉｎ砲の砲撃を受けていることなど何処吹く風で射撃指揮をとる砲術長。おそらく少々目が逝っている。司令部のある第三艦橋から直接は見えないが、先頭の『ノースカロライナ』は艦全体を篝火のように燃え上がらせており、パッと見た所では消火復旧など不可能に思われる損害であったが、射撃速度を落としながらも未だに戦闘を続けていた。

――第七戦隊『鈴谷』

第七戦隊の最上型四隻は、先程の魚雷発射から散発的な射撃に終始していた。
戦艦同士の殴り合いは我が方が敵の一隻を撃破しつつあったが、巡洋艦同士の戦いも今まさに佳境を迎えている。
帝国海軍の誇る九三式魚雷の威力は他と桁違いだ。最も、先の南方作戦の際には早爆も発生したらしく、戦訓に従い水雷長は信管を鋭敏にし過ぎないよう調整していたが、それでも何本か自爆していたようだ、と戦闘概報にはある。
艦橋の総員が右舷側に集まり魚雷の命中を今か今かと待ち望んでいる。ある分隊長などは、何べんも何べんも自分の腕時計と敵艦を代わる代わる見詰めている。見張員達ですらそのほとんどが仕事を放り出して右の敵艦に釘付けとなっている始末だ。
と、その時。巡洋艦の先頭、ニューオーリンズ級『ミネアポリス』のどてっぱらに魚雷が突き刺さり火柱が立ち上る。

「敵ニューオーリンズ級、轟沈！」

大火炎が崩れおちると、米国条約型巡洋艦の中でもずんぐりとした艦体は横倒しになっており、間もなく艦尾からずぶずぶと沈んでい

った。
さらに、同じくニューオーリンズ級の『ヴィンセンス』が艦首に被雷しつんのめるように速度を落とし、駆逐艦の一隻など火柱が上がったかと思うと真ん中から真っ二つに折れて瞬く間に波間に消えた。
「撃沈、ニューオーリンズ級巡洋艦1、駆逐艦1。撃破、ニューオーリンズ級1！」
見張りの声と共に万歳、万歳と艦の各所から歓声が上がり、皆が我を忘れて喝采を叫ぶ。
それを見て、これではいかんと木村艦長が皆をたしなめる。
「何を浮かれておるか、未だ勝った訳ではないのだぞ！
見張り、両舷警戒厳となせ！　『左警戒、右見張れ』を忘れたか！」
『左警戒、右見張れ』とは、海軍にある警句の一つで、一方に気をとられている時でも反対側への注意を怠るな、というものだ。要するに、魚雷の命中に気をとられて左舷を空にしたりしてはいけない、ということである。
見事にそれを頭から飛ばしていた見張りが配置に戻ったかと思うと、すぐに紙片を持って戻ってきた。
「『熊野』より発光信号！　砲撃目標を本艦は損傷巡洋艦に変更せよとのこと！　『三隈』『最上』は目標そのまま、『熊野』は駆逐艦を目標とする、です！　終わり！」
栗田司令官からの命令に、すぐさま表情を平素のものに戻し、主砲指揮所へ命令を下す。

「主砲、目標を損傷巡洋艦へ」
「主砲射撃準備よし！」
意外に早く、準備よし、と返ってきたことに内心驚きつつも表情一つ変えずに号令を発する。
「撃ち方始め！」
艦橋から何も言ってこないことに痺れを切らした砲術科員が独断で照準していたニューオーリンズ級に『鈴谷』の長１５サンチ砲が火を吹いた。

――第三戦隊　旗艦『紀伊』

「第十二斉射用意……弾着！」
《……命中、敵一番艦に命中弾……敵艦中央、副砲群付近にて爆発を確認！》
「艦橋より司令部、敵一番艦に副砲の誘爆と見られる爆発を確認！
また、先程より敵一番艦の主砲沈黙！」
秘密兵器である二式通常弾による戦果に、司令部内にてどよめきが広がるも、歓声があがることは無い。誰もが既に敵艦に捕捉されているのを知っているからだ。
二式通常弾とは、別名を二式焼夷弾ということから明らかなように敵艦に火災を発生させることを主目的とした弾である。ある程度の薄い装甲なら貫徹できるように作られた弾殻には、トリニトロアニソール（ＴＮＡ）、アルミニウム粉末と酸化鉄粉末――所謂テルミット――、チオコール（人造ゴム）、エレクトロン（マグネシウム

合金）屑が充填されている。炸裂すると数千度で燃えるゴム状の物質が辺りに飛び散り、さらに消火しようと水をかけると爆発をおこすという愉快……もとい厄介な代物だ。
この砲弾は、対１６ｉｎ装甲を持つ戦艦を１４ｉｎ砲で無力化せよ、という命令により開発されたもので、開発主任曰く、装甲がぶち抜けないならぶち抜かなければ良いじゃない、という代物である。主目的は榴弾による非装甲目標――艦橋や測距器、アンテナ、機銃、艦載機――や弱装甲目標――副砲、煙突――を破壊し安全に接近して徹甲弾なり魚雷なりで止めをさすことで、副次的な目標として火災を発生させて人員の消耗や速度の低下、あわよくば弾薬庫への引火を狙うというものだった。
先程から沈黙している一番艦と、同じく有効な射撃を続ける三番艦を心中で秤にかけつつ参謀長が口を開く。

「……そろそろ三番艦へ目標を変更すべきではありませんか」
「しかし、手傷を負わせたとはいえ未だ速力は落ちていません。もう少し痛めつけた方が良いのでは？　手負いではありますが健脚な虎を野に放つのは――」

決断するのは司令官の仕事だ、と言わんばかりに取り敢えず反対意見も出しておく千早砲術参謀。しかし、その言葉を遮るように『サウスダコタ』からの砲撃が『紀伊』に襲いかかる。
至近弾とは比べるべくもない衝撃と異質な金属と金属が激しく衝突する音がして、金属の一方がその役目を果たせず虚しく散った。

「第二主砲塔天蓋に命中弾！」
《指揮所より艦橋、司令部。第二主砲塔異常なし！　負傷者若干名あるも戦闘に支障なし！》

幸いにも１６ｉｎ砲対応で張られた装甲が１４ｉｎ砲弾を弾きかえすことに成功したものの、この被弾をきっかけに司令部の空気は参謀長の意見へと傾いた。

「……砲術、全艦目標を敵三番戦艦へ変更」

暫し口の中で何か呟いたあと、三川軍一中将が命令を下す。

「……了解、全艦目標三番艦となせ」

《了解、目標三番艦！　『美作』『尾張』も同様となせ！》

命令が伝わってゆき、『紀伊』『美作』『尾張』の三戦艦の主砲が頭をもたげて新たな目標、三番艦『サウスダコタ』を指向する。

《本艦及び『美作』、『尾張』、射撃準備完了！
初弾用意……撃ぇ！》

三戦艦の放った主砲弾３６発が『サウスダコタ』へと弧を描く。しかし……

「敵三番戦艦回頭！　逃走に移ります！　残存する二艦も同様！」

なんと、一発当てて義理は果たした、とでも言わんばかりに残存艦艇は雁首揃えて踵をかえしたのだ。
誰も予想していなかったタイミングでの逃走に、一瞬虚脱状態になる一同。そのうち、いち早く我に帰った参謀の一人が見張りに問いかける。

「敵一番艦は！？」

しかし、それに答える声は一つではなかった。

「進路変わらず！　直進を続けています」
「艦橋より司令部、如何せられるや！？」
「敵アストリア型甲巡転覆！　七戦隊の魚雷によると思われ！」
「七戦隊栗田司令官より入電！
『我　損傷艦ヲ撃沈セリ　此ヨリ残存艦隊ヲ追撃セントス
　如何セラレルヤ』
　です！」

最初の見張員の報告に引き継いで、艦橋からの指令を請うとの悲鳴。さらには『ヴィンセンス』が沈没したとの報告に、栗田少将からの電信が相次いで舞い込む。
――如何セラレルヤ――皆の視線が三川中将に突き刺さった。

「……無傷の艦を野放しには出来ん。追撃する」

一度決断が下れば後は参謀達の仕事だ。各々が命令に添って各所へ必要な指示を下してゆく、それはさながら予定調和のような澱みない動きだった。

「艦橋了解！　面舵一杯っ！」
「通信！　現在位置と敵艦の進行方向を打電しろ！　特に潜水隊や航空隊に警報だ！」
「針路策定急げ！」
《左舷副砲、射界に入り次第射撃開始！》

伝声管から、或いは伝声管へ、またはスピーカー越しに指示が飛び、喧騒が巻き起こる。

遂にトラック環礁砲撃を諦め撤退を開始した第１６任務部隊第２群。
ほぼ無傷の『サウスダコタ』以下三隻と深手を負った『ワシントン』
『インディアナ』を含む六隻の艦隊は朝日を拝むことができるのか。

つづく

第七話　前門の南雲、後門の三川

先程、第三戦隊旗艦である戦艦『紀伊』に対して命中弾を与えそのまま遁走を開始した『サウスダコタ』と巡洋艦駆逐艦各々一隻づつは、文字通り一目散に、砲撃すら放棄して全速力で逃走していた。それを追う三戦隊も七戦隊も回頭の際に時間をロスしたことや、高速航行中ではろくに狙いがつけられないことから射撃を中止せざるを得ない状況に陥っていた。さらに、上空から照明弾を投下し続けていた陸攻と三戦隊・七戦隊所属の水偵が補給のため離脱してしまったことで、着弾観測にも支障をきたしつつあったことも射撃を中断した要因としてあげられる。

射撃が止んだことで、『サウスダコタ』と共に脱出を図る米艦将兵達に、もしかしたら逃げ切れるかもしれない――そんな希望が見えはじめた。

――しかし、米艦隊は感知していなかった。

彼等が接触したのは巡航速度の違いの為に先行した先遣部隊であり、米艦隊をほぼ撃破してしまったとはいえ本来の任務はあくまでも足止めであったことを。また、今では如何なる意図があったのか、はたまた単純に航法ミスだったのかは定かではないが、彼等の取った針路は奇しくも『愛宕』の――索敵の為各艦・各駆逐隊ごとに散開し、上空に水偵まで飛ばしていたウェーク攻撃部隊主隊の――ド真ん中と交錯していたことなど知るよしもなかった。

最初に接触したのは主隊所属の水偵であった。上空から、夜目にも明らかな全速力で航行する小艦隊の真っ白な航跡（ウェーク）を視認し、『敵味方不明艦隊見ユ』から始まる平の電文を途中まで発信するも、送信中に堂々と敵味方識別灯をつけて追撃する『紀伊』揮下の先遣隊を発見。直ちに訂正電を発した。

――ＷＥ攻撃部隊主隊　第四戦隊第二分隊　旗艦『愛宕』

「『摩耶』二番機より続報！　戦艦はノースカロライナ型、巡洋艦はアストリア型。数は各々一隻づつ！」

灯火管制が行われ暗闇に包まれた『愛宕』の大型艦橋に水偵からの報告が入ってくる。何としても敵艦隊を捕捉しようという意気込みが、『愛宕』の搭載している水偵を正副二機とも投入しているということからも見てとれる。

「うむ。合戦用意！　目標巡洋艦、水雷戦隊の突撃を支援する！」

「了解、左砲雷戦用意！　目標アストリア型！」

南雲長官の命令を参謀長が復唱し、各部署へ順当に伝達されてゆく。しかし、それに続いて南雲長官から発せられた命令は参謀長の目を剥かせるものだった。

「隷下各艦へ、全軍突撃せよ」

「りょ……って、この兵力でですか！？　一旦集合命令を出して、然る後万全の態勢で叩くべきでは？」

この時、旗艦『愛宕』のそばに居たのは暁型駆逐艦四隻で構成された第六駆逐隊と軽巡『音無瀬』のみで、僚艦の『摩耶』と残りの駆逐隊は離れた所を航行していたのだ。さらに、駆逐隊は通常、同型の駆逐艦四隻――稀に三隻――で構成されているが、この時の第六駆逐隊は無理が祟ったのか隊旗艦の『暁』が機関不調で落伍、その戦力を四分の三に減らしていた。

「それでは間に合わん。『摩耶』には駆逐隊と合同し索敵を継続するよう命じよ」

南雲中将としては、集結している間に失探してはことであるというのと、あまりに敵艦の数が少ないということが先の命令の根拠であった。さらに、水雷突撃をかければ回避なり被雷なりで速度を失う。そうすれば、後から追いかけている三川戦隊と栗田戦隊が料理するだろう、という予測もあった。

「……はッ。通信！　『音無瀬』大森少将へ、『直チニ突撃セヨ』。『摩耶』へ、『七駆及ビ二〇駆ト合同シ索敵ヲ継続セヨ』」

「艦長、思いッ切り突っ込んで、一撃にて切り伏せよ。良いな？」

「了解！　魚雷戦用意、左魚雷発射後反転し同航右砲雷戦！　第一戦速！」

艦長の命令一下、主砲や魚雷発射管が旋回し、見張員から刻一刻と送られてくる的速や方位角を元に照準を合わせる。

現在の彼我の位置関係は、単艦で突撃体勢に入った『愛宕』から見て正面を右から左へ『音無瀬』『響』『雷』『電』が単縦陣で横切りつつある。これは、陣形が乱れたまま逃走する米艦隊の手薄な側から丁度“イ”の字を描くようにして雷撃を仕掛け、反対側から巡洋艦を狙う『愛宕』と挟み撃ちにする為である。

彼我の相対速度は４０ｋｔを超える。両艦隊の間はぐんぐん縮まり、アッという間に発射時機となった。

「発射始め！」

「面舵一杯！」

水雷長の号令と共に、シュボッ、シュボッ、という圧搾空気の音を

残して九三式魚雷八本が海中に踊り込み、間髪入れず艦が旋回を始める。

「……ヨシ、戻せ！　第三戦速！」

「了解、第三戦速！」

艦が頭を振り終わり、艦速がじわじわあがっていくのを見すまして指揮所と探照灯へと命令が下る。

「探照灯照射！　主砲・高角砲、撃ち方始め！」

――第一水雷戦隊　第六駆逐隊　臨時隊旗艦『響』

「発射時機近づく！」

「よーし水雷長、逃がすん　じゃあないぞ！」

数刻前に機関不調で落伍した『暁』に代わり隊旗艦を務める『響』の露天艦橋では、駆逐隊全体の指揮も兼任している駆逐艦長が潮気のある声でがなりたてる。それに応える乗員の動きもきびきびとしていて、場慣れしていることを感じさせる。それもそのはず、一水戦に属する駆逐隊は、昨年のマレー沖海戦において巡洋戦艦『レパルス』に対し出会い頭に肉薄雷撃を敢行、これを撃沈した歴戦の部隊なのである。

「『愛宕』探照射撃開始！」

「敵無線を傍受！　著しく混乱している模様！」

「敵戦艦、盛んに発光信号を発信しています」

「……ははあ、我々を味方の増援かなにかと勘違いしたか。よ

し、もっと寄せるぞ！」

敵の混乱を見てとった駆逐艦長は、すぐさま『電』『雷』に対し隊内無線で、緊急一斉回頭で距離をつめるよう指示をだせと命じた。

「六駆隊青々二番艦！」
《了解！　六駆隊青々『雷』！》
「二番艦良し、殿艦！」
《六駆隊青々『電』了解！》
「各艦良し！　右４５度回頭！」

無線でのやり取りの後、ほぼ同時――厳密には『良し』のタイミングで――各艦が回頭し梯陣をなす。
戦隊旗艦の『音無瀬』からは離れてしまうが、水無瀬型の九三式魚雷と特型の九〇式魚雷では性能が違い過ぎる為に元々雷撃統制艦は『響』であり、そこはたいして問題にはならない。

「よし、切り返せ。左一斉回頭４５度」
「六駆隊赤々『雷』！」

再び、今度は逆に一斉回頭を命じ隊列を単縦陣に戻す。
回頭を終えて魚雷発射点へと猛進する六駆隊、その左前方より一閃の光芒が目標である敵戦艦に突き刺さり、直後、光源から発せられた八つの発砲炎が水無瀬型軽巡のスマートな艦影を闇に浮き立たせる。

「『音無瀬』探照灯照射！　射撃開始しました！」
「敵巡洋艦に火柱！　『愛宕』の雷撃と認む！」

鉄を引き裂く轟音に右舷方向を見やると、主砲高角砲でめったうち

にされていたニューオーリンズ級巡洋艦が傾き、炎をあげながら落伍してゆくのが視界に入った。

「はっはっは、ずいぶん明るくなったじゃないか！　後で『音無瀬』と敵サンには礼をいわにゃならんぞ！」

そう言いながら右手を振り上げる駆逐艦長。

「お祈りは済んだか！？　地獄逝きまで三分ぐらいは暇があるぞ？　雷撃始め！」

右手が振り下ろされるのと同時に六本の九〇式魚雷が発射管から打ちだされ、真っ白な空気の泡を盛大に曳きながら敵艦のどてっぱらへと疾走する。それを見た後続の二艦も六本づつ、発射管三基の内二基分を発射した。

「よーし、取り舵一杯！　ずらかるぞ！　主砲、ガンガン撃てぇ！」

重巡とは比べ物にならないほど小さな弧を描いてターンし、手当たり次第に主砲を撃ち込む『響』。駆逐艦の豆鉄砲と言えども撃つと撃たないでは士気が大きく違うし、戦艦でも全てに装甲を纏っている訳ではない。

先程、魚雷を一基分残したのは、急速次発装填装置を備えた朝潮型、甲型、乙型のような新型駆逐艦や一線級の巡洋艦と違い戦闘中に予備魚雷を装填することが出来ないからである。考えてもみて欲しい。2．5tもある魚雷を、格納場所から取り出してダビッドで吊り上げレールに乗せて人力で運び発射管につめる、という作業が戦闘海域で出来るかどうかを。ちなみに、急速次発装填装置ならば、竹筒に入った羊羹を吸い込むが如く数十秒で装填出来る。さすがに弾雨の最中では無茶だが、それでも二回攻撃できるメリットは計り知れ

ない。
とはいえ、こちらの主砲の射程に入っているということは戦艦の両用砲が撃ち込んでくるのも必然であり、戦艦とは比べるべくもない華奢な艦である駆逐艦は一発が致命傷となるために避け続けるより他にない。

「ったく、敵サンは一体どこを狙ってるんだ。あんな下手くそでよく喧嘩売る気になったもんだぞ」
「ははは、皆の普段の行いが良いから艦霊の加護があるのですよッ」
口を歪めてせせら笑う艦長に、舵輪を回しながら航海長が大声で答える。
しかし、『響』が身を捩ってかわしたその直後に真横に水柱が林立する等『サウスダコタ』の射撃は至近に着弾しており、先の二人の会話は士気を保つための芝居であることは明白である。
とはいえ、必中を期すため距離数千まで踏み込んだのだから手荒な歓迎は当然であり、一方で魚雷の発射を許した時点で戦艦の命運は定まっていた。

「さぁて、そろそろ昇天のお時間だぜ？」
左手に握られたストップウォッチが三分を少し過ぎたその時、『サウスダコタ』の塔型艦橋を覆い隠すように水柱が立つ。三本、二本、間をあけて更に三本。
「命中！　敵艦に魚雷命中！」
「いった！！　仕留めたぞ！」
「万歳！　万歳！」
脅威の命中率４４％、八本もの大型魚雷を片舷に叩きつけられて無

事でいられる艦など存在しない。
水柱が収まると敵戦艦は亀の子のようにひっくり返って艦底を顕にしており、やがて、缶室が水に浸かったか弾火薬庫に火が着いたか、連続して大爆発を起こしながら海底へと消えていった。

「……諸行無常……か」
「明日は我が身やもしれませんからね……」

艦橋の喧騒を余所に、軍帽を取り暫時黙祷を捧げる二人。あの爆発ではとても生存者は望めまい。
そこへ、見張員がいつの間にか接近してきていた『音無瀬』からの発光信号を伝えてくる。

「艦長、『音無瀬』より信号。『我ニ従イ単縦陣ヲ成セ』です」
「よし航海長、取舵」
「取舵、宜候」

戦闘が終結し、分散した各隊に集合命令が出る。艦隊の誰もが程度の差こそあれ気を緩めた、その時――

「艦長！　緊急電です！！」
「何事か！？」
「『暁』がッ……！」

――少し時を戻して　ＴＦ１６．２　戦艦『ワシントン』

「……追っ手はなさそうですね」

火災は鎮火し、最大速力の発揮が可能となった『ワシントン』の艦橋で、副長役に収まった格好の士官が呟く。

「油断するな。『インディアナ』があの状態では見つかったら終わりだ。それに……嫌な感じがする」

真面目な顔と声音で首席参謀が答えるが、左手で軍帽をくるくる回し、右手は跳ね放題の後ろ髪を撫で付け、おまけにアホ毛が揺れているようではあまり締まらない。

「成る程安心しました。無線の受信機能は復旧しましたし、首席参謀は自前のレーダーをお持ちのようで……」

「茶化すな。まだ――」

「敵艦発見！　駆逐艦！　１０時方向約５０００ヤード（約４５００ｍ）！　近い！」

軽口を叩いた士官に対する首席参謀の言葉を遮るように見張員から報告が飛び込む。

「艦級は！？」

「わかりません！」

「ええぃ、そこを退け！」

要領を得ない、頼りない見張を押し退けて双眼鏡を覗く首席参謀。趣味で鍛えられた目が目標を識別する。

「……フブキクラス駆逐艦、多分、ヒビキグループ四隻の内の一隻」

「サブタイプまで分かったんですか！？」

「そこは勘。両用砲射撃用意！　無電打たれる前に！　急いで！」

僚艦に伝える暇も惜しんで両用砲が旋回、敵艦へ照準が合わせられる。

「射撃準備完了！」

「敵艦よりの無電発信を確認！」

「Ｄａｍｎ　ｉｔ　！　Ｂｉｇｉｎ　ｆｉｒｉｎｇ　！！」

間に合わなかったことに顔をしかめながら、撃ち方始め、と叫ぶ首席参謀。号令と共に左舷両用砲群が火を吹いた。

つづく

第八話　追撃の一手

ＴＦ１６．２　戦艦『ワシントン』

「撃て撃て！　一刻も早く通信不能に追い込むんだ！」

『ワシントン』の両用砲群が断続的に砲弾を吐き出す。その砲撃で敵艦の存在に気付いたスミス提督の『アストリア』『ポートランド』も射撃を開始し、この憐れな駆逐艦をさんざんに打ち据える。

この駆逐艦は、第六駆逐隊から機関故障により落伍した『暁』。機関が復旧したところで艦の隊列を発見し、味方と思い込んで接近したところに突如砲撃を受けた格好だ。

「巡洋艦戦隊、射撃開始します！」

「よし命中！　艦橋がブッ飛んだぜ！」

「主砲、俯角よし！　撃て！」

『ワシントン』の射撃可能な主砲六門まで加わって榴弾を叩きこみ続ける。さすがにこのような鉄の暴風に耐えられる筈もなく、駆逐艦『暁』はボロ雑巾のようになって沈められてしまった。

「敵駆逐艦撃沈！」

「よくやった！　引き続き周辺を警戒せよ」

撃沈の報に対しほっとしたように指示をだす士官。しかし、横に立つ首席参謀は苦虫を噛み潰したような表情をしている。

「何が、よくやった、だ。あれだけの時間が有れば電文の一つや二

つ打てる。確実に追撃がくるぞ」
乗員の士気を慮り声を落としてはいるが、その声音には苦々しげな響が含まれている。
「何故です？　……このような言い方はしたくありませんが、突入した『ノースカロライナ』『サウスダコタ』それにニューオーリンズ級の三隻が敵の目を引き付けてくれるのでは？」
その問いかけに嘆息し、黙って南の水平線に目を向ける首席参謀。士官がつられて振り返ると、目を疑う光景が飛び込んで来た。
「……あれは、あの煙の柱は一体？　積乱雲のように浮かび上がって……」
「恐らく、戦艦の断末魔……それも弾薬庫が爆発したような派手な沈み方をしたものだろう。それが別の艦の火災で照らし出されてあ見えるのか……何にせよ不気味なことだ」
真っ黒な煙柱が入道雲のようにもくもくと立ちのぼり、その下部は炎のような赤い光で彩られている。
その根元の惨状を思い描きそうになって、あわててそれをやめた士官が深く考えずに口を開く。
「し、しかし、あれが合衆国艦艇だとは――」
「今までに確認された敵艦は？」
「……14in級戦艦三ないし四、モガミ級巡洋艦四、ユーバリが一隻です」
「では、どちらの可能性が高いかは自明だろう」
ランチェスターの第二法則を当てはめれば数の差は二乗で効いてく

るからな、と続ける首席参謀。

「それに、あれが全力とは限らない。ユーバリがいるなら、奴は駆逐艦部隊の旗艦だから駆逐艦がダース単位でいるだろうし、最悪の場合――」

「最悪の場合？」

「――全てが罠で連合艦隊（コンバインドフリート）の全力が待ち構えている、とかな。……とにかく、有力な敵艦隊と遭遇する公算が大きい。警戒を厳重にするように」

「了解」

若干疑心暗鬼にかられつつも乗員達を戦闘配置につかせる首席参謀。この時既に、彼は肚の中である重要な決定を下していた。

そして、彼の予想通り『暁』の最期の電波に導かれた日本艦隊がひたひたと第二群残存艦隊へと迫っていた。

最初に第二群残存艦隊と接触したのは重巡『摩耶』と第七・第二〇駆逐隊の特型駆逐艦八隻であった。この九隻の部隊は、本隊から離れて索敵中に『暁』からの緊急電を受けてその海域に急行したのだ。夜間ということもあり、先に相手を視認したのは『摩耶』であったが、首席参謀の命令で警戒を厳重にしていた『ワシントン』も時を置かずして敵艦隊を認め、まもなく全艦が『摩耶』を含む九隻の艦隊を確認した。

――ＴＦ１６．２　戦艦『ワシントン』

「『アストリア』反転し迎撃に向かいます！」
「スミス提督より入電。我々はこれより敵艦隊の迎撃に向かう、我々に構わず退避せよ」

そう打電すると、『インディアナ』に合わせ１０ｋｔ足らずで航行している隊列を抜け出してスミス提督指揮下の『アストリア』『ポートランド』　と駆逐艦二隻が踵を返した。

「『ポートランド』星弾発射！」

『ポートランド』の高角砲から星弾が撃ち出され敵艦隊を照らしだす。
星弾とは、艦砲から発射される照明弾のことで、スターシェルとも呼ばれる。
この類いの弾を装備していなかった日本艦隊は、打ち上げ花火のような星弾に照らしだされながら接近を続けていた。

「敵艦はタカオクラス巡洋艦及びフブキクラス駆逐艦！」
「第二巡洋艦戦隊射撃開始！　あっ、敵艦発砲！」

矢継ぎ早に報告が届き、互いの巡洋艦が８ｉｎ砲を振りかざして組み合う。砲力に勝るスミス提督の隊は魚雷の間合いに踏み込むのを嫌い、駆逐艦数に勝る日本艦隊は逆に距離を詰めようと運動したため、両部隊は『ワシントン』『インディアナ』の両艦から急速に離れていこうとしていた。

「主砲発射準備よし！　ご命令を！」

この艦に残された六門の１４ｉｎ主砲が射撃可能であることが艦橋に伝わって来た。
しかし、それに対する首席参謀の命令は少々意外なものだった。
「主砲射撃待て。『ワシントン』へ発光信号を……」
「何と？」
「我々はスミス提督を支援する、必ず追い付くので先に退避されたし。貴下に神の恩寵あらんことを」
「……了解」
その文面に不吉なものを感じたのか顔を曇らせる一同。それを見た首席参謀が安心させるように言う。
「大丈夫だ。私はまだまだ死ぬつもりは無いよ」
皆に柔らかい笑顔を見せ、すぐに表情を引き締めて軍帽を被り直す。
「取舵一杯、左砲撃戦用意、目標タカオクラス。戦闘巡航！」
「Ｙｅｓ，ｓｉｒ！」
『ワシントン』が増速しつつ左へ回頭し、その主砲が『摩耶』へと狙いを定める。
「舵戻せ！」
「主砲射撃準備完了！」
「最初から斉射で行け！　此方が損傷していることを悟らせるな！」
「了解！」
第一砲塔の四門と第二砲塔の二門が１４ｉｎ砲弾を撃ち出す。その際の閃光で傷ついた『ワシントン』の艦橋がくっきりと闇に浮かび

あがる。
その六つの発砲炎は、スミス隊の将兵には心強く、『摩耶』及び第七・第二〇駆逐隊の将兵には大きな脅威に映った。
そして、その閃光を見た者はそれだけではなかった。

――WE部隊　第三戦隊付属　駆逐艦『秋月』

そう、何故か同型艦と隊を組まず一隻だけで三戦隊に編入されていた乙型駆逐艦の一番艦『秋月』である。よもや忘れていたなどということはあるまい。
この艦は、就役して日が浅いにも関わらず必要最低限以下の戦隊行動訓練で海戦に参加する羽目になった。そのため、いざ戦闘が始まるとうまく艦隊行動に追従出来ずはぐれてしまったのだ。
そして、無線封止を破る訳にもゆかずうろうろしていたところに先の電文を受信し、勇んで馳せ参じたのである。

「あれが『暁』からの電文にあった戦艦か！？　『暁』は確認できるか？」
「間違いありません。しかし『暁』は……あの様子では既に……」
主砲の残光をじっと見つめながら問う駆逐艦長に、航海長が無念そうに答える。彼は、『暁』からの電文が繰り返し一回目の途中で途切れていたことから、もはや絶望的と判断していた。
「艦長！　仇を、『暁』の仇を討ちましょう！」
「そうです艦長！　我が四連管はこの時の為ぞあるのです！」
砲術長と水雷長が口々に言う。今まで戦局の蚊帳の外に置かれてい

た鬱憤を『暁』の仇に叩きつけようというのだ。

「……よし、右魚雷戦用意。この位置からだと反航だ。時間がないぞ！　発射諸元算出急げ！」

おそらく間もなくやって来るであろう本隊の到着を待つか否か、僅かな間逡巡した後右魚雷戦を発令する艦長。

「雷速最大に調定！　散角は僅かで良い！　お前ら絶対トチるんじゃねぇぞ！！」

水雷長の怒声と共に『秋月』の装備する唯一の四連装魚雷発射管が旋回し、命令を待つ。彼我の相対速度は４０ｋｔ強、両艦の間はみるみる縮まってゆく。

「的速１６ｋｔと認む……あッ！　敵両用砲群こちらを指向ッ！」

「敵艦発砲！　気付かれた！　照明弾による照射を受けています！」

見張りの叫ぶ声とほぼ同時に両用砲群が発砲し、星弾の光が『秋月』を照らし、ヒュンヒュンという残響を残して航跡のそばに水柱がたつ。

「うろたえるな！　音が聞こえてるうちは当たりゃせん」

「魚雷発射と同時に撃ち方始めだ！　長十サンチの御披露目だ、今からしっかり狙っとけ！」

思わず首を竦める水兵を先任がどやしつけ、砲術長が拳を握りしめ指示を飛ばす。

次の着弾は艦の前方に夜目にも鮮やかな白銀の水壁を作り上げ、艦がそこに突っ込み硝煙臭い海水で艦橋を水浸しにする。

そして、水柱の並木通りを抜けた『秋月』の眼前に『摩耶』へと主砲射撃を続ける『ワシントン』の姿が浮かびあがる。
魚雷を撃つまで砲撃を行わないのは、駆逐艦程度の排水量では砲撃を行うと衝撃で照準がぶれるため、砲撃は雷撃の後とされているからである。そのため砲術長は少々手持ち無沙汰な感がある。
その横で『ワシントン』を睨み仁王立ちしていた艦長が遂に動いた。

「発射始め」
「撃ェー！」

絶好の射点から、絶好のタイミングで発射された四本の九三式魚雷が頭を揃えて『ワシントン』に向かう。

「よし、取舵十。射撃開始！　ずらかるぞ！」

着水後、僅かな間だけ曳く空気の泡の消えた先、数分後には巨大な火柱に包まれ轟沈するであろう『ワシントン』を見詰めつつ艦長が退避を命じ、四基の連装新型高角砲が唸りをあげる。
そして――

――戦艦『ワシントン』

「糞っ！　なぜ接近に気付かなかった！？　早く撃沈しろ！」
そう喚く士官を尻目に首席参謀が腰に手をやりつつ冷静に指示を飛ばす。

「見張、距離読み上げろ。魚雷発射の兆候を見逃すな」
「はッ！　ユーバリクラスまで一万二千ヤード（約１１０００ｍ）を切りました！」
大型双眼鏡を覗きこんだまま見張員が叫ぶ。それに対し、記憶を探るように首席参謀が呟く。
「ふむ、確か日本のＴｙｐｅ９３魚雷の最大射程はそんなもんだったかな」
「嘘でしょう？　ウチのＭｋ．１５魚雷の倍以上あるじゃないですか！？」
「そんないくらでも誤魔化し利くものを馬鹿正直に公開しないだろう。ただ公式発表では４２ｋｔで１２０００ｙｄだというだけだ」
ちなみにこの公式発表、射程で１１０００ｍ、速度で１０ｋｔばかりさばを読んでいる。
それはさておき、魚雷談義に盛り上がっている二人に見張からの奇妙な報告が届いた。
「敵艦魚雷発射しました。……しかし――」
「しかし？」
「……雷跡が消失しました。最初は曳いていたのに見当たりません。間違いなく」
その報告に、得心したように士官が嘲笑する。
「……ハハッ、故障か怖じ気づいたか……所詮猿どもと――」
「口を慎みたまえ」
主砲斉射の盛大なマズルフラッシュを背景に、珍しく怒気を含んだ

口調で首席参謀が士官の言を遮る。

「……徒に敵を貶める言は、相対する味方をも貶めることになるばかりでなく無用な流血を招く」

首席参謀の言葉に、はっ、とした表情を浮かべる士官。それを見て僅かに語気を緩めて続ける。

「つまり、劇場のイドラに捕われるべきではないということだ。正しい認識を妨げる偶像(イドラ)は打ち破らねば……」

そこまで言った所で、首席参謀はふと思い直したように見張に尋ねかける。

「ときに見張員？」

「は、なんでしょう」

「敵艦の様子は？」

「先程の艦は逃走しました。スミス隊はタカオクラスに多数の命中弾を与えている模様」

見張の返答に、あれ、と呟く首席参謀。

「てっきり何か仕掛けてくるかと思ったんだが……」

「何か、とは？」

「アレを陽動に別動隊が……とか。右手でハンカチを振ってる間に左手で鳩を取り出すのは手品の常套手段だか――」

彼が疑念を表明し終わる前に、手品の種は明らかとなった。

「右舷前方より魚雷！　無航跡です！？」

「な！？　Ｈａｒｄ　ｔｏ　ｓｔａｒｂｏａｒｄ！！」

咄嗟に取舵一杯と命ずる首席参謀。しかし、帝国海軍の秘密兵器たる酸素魚雷を至近距離でかわせる筈もなく、三本の魚雷はその弾頭炸薬４８０ｋｇのエネルギーを解放し、艦橋より遥かに高い水柱で彼らの視界を覆い尽くした。

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4979u/

高速戦艦『紀伊』夜襲命令

2011年12月11日23時51分発行